

# スマイルタイムズ

No. 198

## 誰か私を助けてくれないかな

院長 中山 茂樹

秋の気配を感じる日々となってまいりました。

この気配は季節だけでいいので、政治、経済がそうなのは欲しくないものです。

私は医師は政治、宗教には関与しないというのが持論ですが、日本人としての誇りはしっかり持っているつもりです。

オリンピックのように、日本人がその競技に参加しているときと見たくなくなってしまいました(勝とうが負けようが)。そして大舞台に立っている人はすごいと感じていました。勝った時はもっと嬉しかったですが…。

スポーツは情報がしっかりしていてルールも世界共通ですが、政治は国々の考え方、ルールがあり、情報も一定でないので、意見が衝突するのでしょうか。

これも持論ですが、国々と考えるより、みんなが地球人と考えれば国境がなくなると思いますが、長い歴史があるので、難しいのでしょうか。まずは第一歩の、互いが地球人と考えるところから歴史を作って行ってはと思えてなりません。

人は絶対的なものではありません。成功するも失敗するも人なのです。歴史はそれらを大きく寛容の精神で乗り越えて来たはずなのに、まだ、争おうとするのでしょうか。自分一人が良ければ他人はどうなってもよいはずがありません。自国が良ければ他の国がどうなってもよいはずがありません。

私は日本人の美德は互いが助け合い、支え合う大和魂にあると思っています。祖先に感謝し、先人に恥じない行いをするのが日本人だと信じています。

話変わって…さてさて、産婦人科医が早く増えてくれないかなア。1978年卒業して、30年余り、がむしゃらに働いてきましたが、多少疲れて来ました。現在、月1回、大学から1日アシストをしてもらっていますが(1日だけでも大感謝)、もう少しアシストをして欲しいものです。しかし、大学にはもう人が居ないとのこと。私が卒業の頃、産婦人科になろうとする医師が減ってきているとの情報が入っていましたが、あれから30年、さらに減っているのですから、そう簡単に増えるはずは

ないでしょう。

寂しい、産婦人科医の独り言ですネ。ハハハ…。

### ☆学 習☆ 子宮頸ガンのこと

こんなことがよそでありました。

当紙前々回196号(7月24日発行)にもとりあげました子宮頸ガンについて別の側面から書いたものです。

東大中川恵一准教授の文を参考にさせていただきました。

結婚して間もないA男さんは妻のB子さんが子宮頸ガンだと分かりました。二人の間にはまだ子供はなく、A男さんとB子さんはCお母さんと同居しています。Cお母さんは夫と死に別れ、女手一つでA男さんを育てたので大切な大切なひとつぶだねです。B子さんの頸ガンは全摘(子宮を全部とる手術)の必要があると担当の医師から告げられました。それを聞いたCお母さんは悲しみのどん底に落とされ、次は怒りに変わりました。それでは毎日待っていた孫の顔が見られない、自分の家の跡取りが無くなる! Cお母さんは生半可に子宮頸ガンは感染症だと知っていたのです。B子は誰かにうつさされていたんだ!ということは結婚前に息子以外の男と出来ていたんだ、と思いました。

B子はひたすら純真でまじめで過ごし、男はA男以外は全く知らないで結婚したのでした。そのことをA男にもCお母さんにも訴えますが信じてもらえません。しかし、B子は一番自分のことが分かっているのだから、A男に詰め寄りました。“本当に私はあなた以外の男の人は知らないんヨ”その真剣なまなざしにA男は白状しました。“すまない。自分はお前との結婚前に経験があったんだ”と。

Cお母さんもそれを知ってB子に謝りました。原因、責任はすべて息子にあって、B子には全くないことを理解したのでした。B子に息子と離婚してくれと迫った自分が間違っていたと恥ずかしくなりました。

B子さんはその後、医院を変えて「全摘」ではなく「円錐切除」で済むかもしれない、と判断されました。これで妊娠の可能性は出て来ました。

… … … … … … … … …

＜あとがき＞ 1)今夏は猛暑でした。一昨年暑く、174号(9月27日発行)のあとがきにも書きましたが、さて今夏とどちらが暑かったのか。皆様、夏バテはございませんでしたか。それでも9月2,3日から急に涼しい風が吹きわたり、22日(お彼岸、秋分の日)を過ぎるとあの暑さはどこへ行ったことやら。 2)当院、ミニギャラリー第60回は東護(あずま まる)さん(小浜市駅前町)の油絵です。「放生祭」の太鼓が力作です。